

「作業科学における場所の再考：トランザクションの視点から」

坂上 真理

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

私たちの作業は場所(place)の中で行われ、その場所によって大きな影響を受けている。場所は時間的な側面とともに、作業の成り立ちに関わる重要な特性である。そのため、作業科学においても作業が行われる場所に着目した研究が数多く報告されてきた。作業科学で場所という概念を扱う場合には、単なる物理的な特徴や地理的な位置だけではなく、そこで作業を行う人々の経験や場所の意味も含めている。本稿では、作業が営まれる場所、そして作業と場所（もしくは環境）の関係に関するこれまでの作業科学研究を振り返り、私たちが本当の意味で人々の日常の生活に近づくための視点を問い直す。特に、プレイス・メイキングとトランザクション(transaction)の視点を取りあげ、作業が営まれる場所を固定化されたモノではなく、作業を通してその形も意味も作り替えられていくコトとして捉えられることの意義を示す。

作業科学研究, 9, 2-11, 2015.

キーワード：作業, (プレイス・メイキング), (トランザクション論)

The 18th Occupational Science Seminar, Tsuyoshi Sato Memorial Lecture

Revisiting “Place” in Occupational Science: from a Transactional Perspective

Mari SAKAUE

Department of Occupational therapy, Sapporo Medical University

We engage our occupations in places where they are strongly influenced. Place, including its temporal aspect, is an important characteristic related to our occupations. Even though many occupational science studies have addressed and reported about the places where people engage in their occupations, in Occupational science the concept of place not only includes the physical features and or geographical location, but also people's experiences and meaning of place.

Following the tracing of the history of occupational scientific research focused on the place, in which people engage in their occupations and the relationships between place and occupation, the author will identify the necessary perspectives relating to place and occupation in an effort to truly understanding real people's lives. Picking up on the “perspectives of place-making and transaction”, the author will show to the significance of understanding places not just as static environments but also for the dynamic conditions, which are being recomposed repeatedly through engagement of occupations.

Japanese Journal of Occupational Science, 9, 2-11, 2015.

Keywords: occupation, (place-making), (transactionalism)

はじめに

私たちの作業は場所 (place) の中で行われ、その場所から大きな影響を受けている。

「作業と場所」をテーマとした私の探求は、老人保健施設 (以下、老健) に勤務していた頃のある事例との出会いがきっかけとなって始まった。時代は 90 年代。差し迫る高齢化社会への対応に向け、社会が大きく動いていた。作業療法では、専門性の核として「作業」に脚光があたりはじめ、学会で人間作業モデルを使った事例発表を目にすることが多くなっていた。1995 年には全国研修会が札幌医科大学で開催され、南カリフォルニア大学の Clark 先生と Zemke 先生を招聘し、日本で初めての作業科学の講演である「作業学—リサーチと実践に向けての新しい展望」(Clark, 1995) が行われた。

「作業科学における場所の再考」と題した本稿では、作業科学において場所がどのように扱われてきたかの変遷を辿り、「作業と場所」を扱う実践と今後の研究に関する私見を述べる。その中で、作業科学の発展に寄与すると思われるプレイス・メイキングの概念とトランザクションの視点を紹介すると共に、作業科学とは異なる学問領域から始めた研究を、作業科学研究に近づけようとしてきた私自身の歩みも交えて報告する。

序章：「作業と場所」の探求のはじまり：

ある事例 — シズさん (仮名) との出会い

シズさんは、小さな平屋で一人息子と暮らす 80 歳代前半の女性であった。日中は、居間のソファに座りながら一人で留守番をして、息子の帰りを待って暮らしていた。彼女は、認知症の症状が進み、訪問看護サービスを利用することになった。私が看護師に同行して自宅を訪問すると、シズさんは優しい笑顔で私たちを迎え入れ、ソファの前のテーブルに置かれた急須と湯飲みを使って、ゆっくりとお茶を入れてくれた。テーブルの上には仕事に出かける前に息子が書いた一枚の便箋が置かれていた。便箋には、『今日は看護婦さんが来るのでお茶を出してください』との文章。私たちが便箋のことを尋ねると、シズさんは「息子が書いた…」と優しい母の顔で静かに答えてくれた。

冬を迎え、シズさんは日中のストーブの管理が心配となり、老健に冬季入所することとなった。しかし、入所後、シズさんは大きく変わってしまった。施設では、あの優しい母の顔はなくなっていた。その代わりに、シズさんはいつも困った顔をして、時々怒りながら、一人、どこに行くともなく歩いていた。「ここは、どこ?」。シズさんは、自宅で会ったあのシズさんとは別人になって、老健で働く私に

尋ねてきた。

一般的に、認知症高齢者は環境変化に適応することが難しいと言われている。しかし、この説明だけでは、老健入所がシズさんに何をもたらしたかまではわからない。さらに、「環境変化」という言葉も、この状況を理解するには曖昧すぎている。当時、老健が理念の1つとして掲げていた「家庭的雰囲気」という言葉が意味することへの疑問も重なり、この事例との出逢いをきっかけに、作業と場所の探求が始まった。

第1章 場所の再考

1. 場所—その多義性

私たちが、日常的に「場所」という言葉が使うときには、「置き場所」、「病院の場所を尋ねる」、「自分の場所を確保する」というように、空間内の位置やある一定の区域を意味することが多い。さらに、日本語の場所は英語では place となるが、『リーダーズ英和辞典』(第2版)によると、place には前述した意味の他にも one's place of work (職場)、place of amusement (娯楽場・遊び場) など特定の目的で使用される建物という意味がある。

このように、一般に場所という言葉を用いる場合には、位置や物理的な特徴を意味することが多い。一方、1970 年代に入ってから、「場所」の多義性が論じられるようになった。その中心となったのは人文主義的地理学 (humanistic geography) であり、そこでは場所を人々の経験と結びつけて考えている。人文主義的地理学の代表的な研究者には Tuan や Relph がおり、彼らの報告は作業科学における作業と場所の議論にも多大な影響を与えている。

Tuan は、空間と場所の違いに触れ、明確な特徴をもたない空間に対して、人々がそこに価値や意味を与えていくことで空間が場所になると述べている (Tuan, 1993)。さらに、Tuan と Relph は場所における人々の経験に着目し、これを場所の感覚 (または、場所のセンス: sense of place) と紹介している。場所の感覚は、我々がある場所に馴染んだときに経験する感覚や場所の捉え方であり、この感覚をもつには時間がかかることも指摘されている (Tuan, 1993, Relph, 1999)。場所の感覚の例として、家 (home) での経験がある。プライバシーが守られる家では、多くの人は安心や安全感、自分のものであるという占有感、くつろぎなどを経験する (Stanyer, 1994)。ただし、最初からこのように経験されるのではない。この経験は、そこに住み慣れ、馴染んでいく中で生まれてくるものである (吉永, 2007)。新しい家屋に移り住んだ人ならば、最初はどこかしっくりとしない感覚が次第にその

家に馴染み、家のことが気にならなくなる感覚へと変わっていく経験をしたことがあるのではないだろうか。さらに、場所の感覚は、個人的なものだけではない。場所の感覚が集団によって共有され、その場所が象徴的な意味を帯びる場合がある。例えば、神社。厳かな雰囲気が漂うこの場所は、神聖な場所として人々に理解されている。そして、人々にその意味が共有されることで、場所での振る舞い方も自然と決まってくる。神社の中ではお参りをする人がいても、公園のように敷物を広げて団欒しながらお弁当を食べる人を見ることはない。あるいは、神社の中で、海外からの観光客が、大きな声で話す様子を見て、違和感を抱いたことはないだろうか。自然に沸き上がってくるこの違和感は、当たり前として身に付けた場所の感覚や意味の共有にも関係しているのかもしれない。

2. 最初の研究：虚弱高齢者が転居した後の場所の構築過程

こうした場所の特徴をふまえ、初めに取り組んだのは、ケアハウス^{脚注1)}に入居する虚弱な高齢者を対象とした場所の構築過程に関する研究だった(坂上, 2007)。ここでは、場所を物理的な特徴と経験の両面から捉え、入居後にケアハウスという施設環境内にどのような場所が構築されるかを検討した。もちろん、研究動機にはシズさんのことがあった。環境の変化が彼女に及ぼした影響を知るため、まず場所に注目した。ただし、最初から認知症のある方達を対象とはしなかった。高齢者が本来備えているストレンクス(強み)と、自然な状況下での生活を明らかにするため、作業療法士が直接関わらない状況で調査することとした。研究方法は、質的研究を選択し、ケアハウスに不定期に通いながらフィールドワークによる参与

観察と半構造的面接を実施した。調査の結果、ケアハウス入居者は、入居後に3種類の場所を構築していることがわかった。3つの場所は、入居者同士または入居者と職員との関係と、その関係が繰り広げられる空間の特徴から「受けとめられる場所」、「与え合う場所」、「馴染みの場所」とカテゴリーに分類された(図1)。そして、新たな環境に適応するためには、これらの場所を構築することが重要であることが示唆された。

しかし、このように場所の類型化はできたものの、このままでは新しい環境で新たな生活を築きながら生きている人々の姿を明らかにするには限界があった。そこで、作業の視点を含めた研究への転換を考えるようになった。どのようにすれば場所の研究を作業科学研究へとシフトすることができるのか。作業科学の先行研究を再検討しながら、人、場所、作業を結びつける糸口を探した。

第3章 作業科学における場所と作業

1. 作業科学の場所の議論

作業科学は、私たちの作業と場所との深い結びつきを指摘している(Zemke, 2004, Hamilton, 2010)。これまでも、場所をテーマとした作業科学の学術集会が開催され、作業科学の雑誌では場所の特集が組まれてきた(表1)。さらに、人々の作業を支援する作業療法においても、表2に示したように1980年代以降、環境を含めた作業療法モデルが数多く発表されている(Stark et al., 2005)。

最初の頃は、主に物理的な特徴や位置から環境あるいは場所が捉えられ、それらが人々の健康やウェルビーイング、作業のあり方に及ぼす影響について論じられていた(Seamon, 2014)。しかし次第に、前述した Tuan や Relph、さらには同じく人文主義的地理学者の Rowles の



図1 高齢者の転居後の場所の構築

影響を受け、外的な側面や位置 (external or location) だけではなく、経験的な側面 (Zemke, 2004) からも作業に対する環境や場所の影響が考えられるようになった。

この経験的な側面を扱った作業科学研究には、認知症高齢者に関わるデイケア職員の経験をテーマとした Hasselkus の研究がある。Hasselkus は、Tuan の経験的空間と場所の概念を取り入れ、デイケアで構築される作業的空間 (occupational space) と作業的場所 (occupational place) について報告をしている (Hasselkus, 1998, 1999)。作業的空間は、デイケア職員と利用者が作業を協業しているときの経験であり、作業を行う前のフェイズ、職員と利用者が一緒に作業を行うフェイズ、両者がウェルビーイングの状態を経験するフェイズからなる。このうち、クライアントとセラピストが実際に作業を行っている間に生じるのが作業的場所である。作業的場所では、職員と利用者は親密な関係を築いており、それにより両者は作業的空間内で経験を共有する。

ところで、Zemke は、Hasselkus の研究の中で、場所を作る行為に着目し、プレイス・メイキング (場所作り; place-making) の概念を紹介している。プレイス・メイキングとは、「場所を創造し、維持する行為」(Zemke, 2004) であり、Hasselkus の研究 (1998, 1999) では、作業的空間において作業的場所が構築される過程のことである。さらに、Hasselkus は、作業的場所では職員と利用者は、利用者のニーズや状態に合う方法で共に作業を行いながら、環境と一緒に修正していることを指摘している。また、経験的な側面では、作業そのものが場所であるとも述べている。ここから、Hasselkus の研究におけるプレイス・メイキングとは、親密な関係を経験する場所が具体的な作業を通して立ち現れる過程として理解できる。

他方、Johansson ら (2013) は、高齢の移民をテーマとした作業科学研究において、プレイス・メイキングを「人々が物理的な空間を社会にとって意味のある場所へと変えていく過程」と説明している。Johansson らは、この概念を用いることで、多様な文化や社会的背景をもつ人々が、日常の作業を通して、社会の中で共有される場所や場所の感覚をどのように生み出し、折り合いをつけるかの知識を構築できると述べている。前述の Hasselkus は、ある個人が他者と協業して構築する場所に言及していたのに対し、Johansson らは個人のほか、共同体や社会が構築する場所にも触れている。そのため、両者では、プレイス・メイキングに関わる主体もしくはクライアントの範囲に違いが認められる。しかしながら、Hasselkus も Johansson らも、人々が作業を行うことによって場所あるいは場所の感覚が生じると述べており、プレイス・メイキングの過程における作業の

働きに触れている点は同じである。

2. 作業科学の研究へ：作業としてのプレイス・メイキング

このプレイス・メイキングの概念によって、私が行った場所の研究を、作業科学研究と結びつける糸口が見えてきた。前述した3つの場所がどのように構築されていくかを検討すると、入居者が営む作業と関係しながら3つの場所が順を追って構築されていることがわかった (坂上, 近藤, 2010, Sakaue, 2008) (図1, 図2)。

まず、入居者たちが、ケアハウスに入居して最初に構築するのは「受けとめられる場所」であった。職員たちは、入居者に施設活動や日課を行う機会を提供するが、入居者はこれらの作業を定期的に行うことによって、新しい環境の中でも安全で守られているという保護的な場所を経験していた。その後、「受けとめられる場所」を構築した入居者は、施設スケジュールに添った活動場面や、その活動への行き帰りに他入居者や職員とある決まった場所で定期的に出会うようになった。そのような機会のなかで、自分の作業との相性が良い人や環境が見つかる、職員や他入居者と互助的な関わりを経験する「与え合う場所」が構築された。「与え合う場所」のプレイス・メイキングの過程では、入居者は自分がこれまで身に付けた方法や作業を通して他の入居者と関わり、それを繰り返すことによって自分の作業に丁度良い人を見つけたい。さらに、入居者は、入居当初は施設スケジュールに合わせた生活を送っていたが、他入居者や職員との関係が深まるに従い、自分が行いたい、あるいはこれまで行ってきた作業を優先させるようになっていた。このような作業を行う場所が「馴染

入居直後

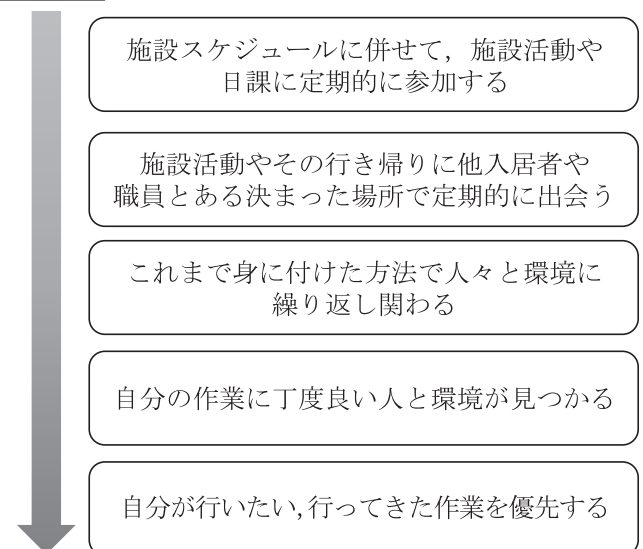


図2 作業としてのプレイス・メイキング

みの場所」である。そして、入居者は、この場所で自分が生活の主体となっていることやウェルビーイングを経験していた。

こうして、場所を類型化した最初の研究をプレイス・メイキングの切り口から見ると、入居者たちが営む作業によって刻々と移り変わるプレイス・メイキングの過程を知ることができた。

第4章 プレイス・メイキングからの「人—環境—作業」関係の再考

ある事例との出会いから始まった私の研究では、プレイス・メイキングは、場所の探求を、人々の行為や作業の探求へと転換する重要な概念であると考えられた。しかし、この概念でさらに重要なことは、「人—環境—作業」の関係について、従来の相互作用 (interaction) の視座を超え、トランザクション (相互浸透) 論 (transactionalism) と共に論じられていることにある。トランザクション論は、場所が物理的な側面や位置だけではなく、そこでの人々の経験を含めて考えられるようになった頃から、「人—環境—作業」の関係を説明する新たな視点として紹介されるようになった。

1. トランザクション論と作業科学

2006 年以降、Journal of Occupational Science にはトランザクションもしくはトランザクション論を説明した論文が複数掲載されている (Shank & Cutchin, 2010, Kuo, 2011, Cutchin et al., 2008, Aldrich, 2008)。また、海外に留まらず、日本の作業科学の雑誌である『作業科学研究』でもこの概念が紹介された (Josephsson, 2009)。元々、トランザクションはアメリカの哲学者 Dewey らが提唱した概念であり、人と環境を分けて考える二元論ではなく、全体論の立場から「全体としての環境内の有機体」を提案する (Josephsson, 2009)。そして、人と環境は、調和しながら共に変化し続けていることを前提としている (Shank & Cutchin, 2010, Kuo, 2011, Aldrich, 2008)。さらに、作業の発端といえる行為は、個人が生み出すというよりも、個人を含む状況の中で生じ (Tupe, 2014)、行為はそれが生じている状況から取り出せない (Aldrich, 2008) と考えている。

全体論から作業を捉えることは、作業科学だけではなく、作業療法にも取り入れられている。アメリカ作業療法士協会 (American Occupational Therapy Association : AOTA) による「作業療法の実践の枠組み」では、2008 年に改訂された第 2 版の中でこの作業療法モデルを説明する際に、そして 2014 年の第 3 版の中では「人—

環境—作業」の関係を述べる時にトランザクションの言葉が使われている。また、2014 年に出版された『Willard & Spackman's Occupational Therapy』(第 12 版)においても、トランザクション論が初めて詳細に記載された。

ところで、トランザクション論の説明の中で、私が着目したのは、個人と個人を取り巻く環境はお互いがセットとなり、共に構築されるという「共構築 (co-constructive) な関係」である。何故なら、この見解は、従来の相互作用論が持つ考え方と大きく異なっていると同時に、プレイス・メイキングの概念につながる重要な視点だからである。ここでまず、相互作用論との違いについて説明すると、相互作用論では環境を人の外側に位置づけ、それぞれ分離された要素と考えている。さらに、相互作用によって各要素がもつ意味やアイデンティティが変化することを想定していない。他方、トランザクション論が示す共構築な関係では、環境の中に人を位置づけている。そして、人と環境が関わりながらお互いが変化し、人と環境をつなぐ意味が構築されていくと考えているのである。この関係について、環境心理学者の南がトランザクション論を説明するために用いた「ゴミ問題」の記載を引用したいと思う。

・・・この世界には、最初から「ゴミ」であるようなものが存在するわけではない。それは、ついさっきまで食べ物であったり、商品であったものであるが、人が捨てたときに、それは「ゴミ」と呼ばれるものになる。つまり、ゴミとは「ものを捨てる」という人間行為のなかで現れる現象の側面である。ここには、刻々変化していく「もののかかわり」の全体系があり、ある時点から、食べ物がゴミになる。ゴミという事象は、時間を内包した出来事であり、人間行為と分かつことのできない領域である (南, 2006)。

この例では、人と環境の変化とは環境の知覚や意味の変化であり、この変化は行為を通して起こることが指摘されている。つまり、人と環境は行為によって結び付く。そして、人と環境に生じた関係は、行為と共に変化し続けながら、「意味」として人々に理解されるようになることが示されている。そして、ここでは、行為もまた、時間とともに連続して流れていくと考えられている。このように見えていくと、南が例に挙げたように、「ゴミ」とは、人と環境、行為の持続した関係の中から構築される「現象」であり、独立した要素としての「ゴミ」が最初からあると考える相互作用論とは見解を異にすることがわかる (南, 2006)。

では、行為によって変わるのは、知覚や意味、つまりは人と環境の関係のあり方だけだろうか。ここで、「林檎を

食べる」ことを例にあげると、「食べる」という人間の行為の中で、赤く丸かった林檎は「食べ物」という意味を与えられるとともに、人にかじられてその形を変える。あるいは、「捨てる」という行為の中では、林檎が「ゴミ」という意味を持つとともに、芯だけとなった林檎の姿や人の手を離れてゴミ箱へと移動した姿を見ることができる。このように、人の行為が行われる中で、意味だけではなく、見た目もまた変わりうるのである。こうして、「共構築な関係」から生じる変化は、出来事の外的な側面と経験的な側面から論じることができる。

さらに、「共構築な関係」では、人と環境、そして行為に生じる変化は、持続しているだけではなく、折り合いをつけながら展開している (Shank et al., 2010, Kuo, 2011, Aldrich, 2008)。つまり、この関係では、それぞれの要素はバラバラに変化するのではなく、お互いにとってよりふさわしい形になりながら1つのまとまりとして変わっていく。人がいる環境は、その人の行為のなかで、その行為に調整されながら、丁度良い具合にデザインされ、置かれる道具や配置が変わるのである。同時に、そこにいる人も、その環境に見合った経験や態度をもち、行為を調整している。

以上のように、トランザクション論では、人と環境は、行為を通して交わり合い、お互いの意味や形を調和させながら一緒に変わっていくと考える。また、この関係において作業を考えると、行為が次々と展開するとき、これらをつなぎ合わせた全体を作業として説明できる。つまり、一貫した、あるいは関連のある意味によって複数の行為が結ばれることで、我々はそれを作業として理解するのである。

2. トランザクション論とプレイス・メイキング

では、トランザクション論や「共構築な関係」とプレイス・メイキングはどのような関係にあるのか。Aldrich (2008)は、「共構築な関係」から展開し、トランザクション論の中心的な考えは成長 (growth) であると指摘する。そして、プレイス・メイキングもまた、空間が作業を通して場所になっていく過程を説明する概念である (Hasselkus, 1998, 1999, Johansson et al., 2013)。そのため、プレイス・メイキングは、調和した状態に戻ることを根底においた相互作用論 (Aldrich, 2008) ではなく、現象の成長や構築といった動的なプロセスを論じるトランザクション論と見解が重なっていると言える。また、プレイス・メイキングにおいて場所との一体感である「場所の感覚」が構築される過程は、トランザクション論が持つ全体論の立場から、人、環境、行為が1つのセットとしてまとまっていく過程として

説明することができる。

他方、「共構築な関係」は、プレイス・メイキングの成立の仕方と、人と環境の関係を支える地盤についての示唆を与える。つまり、「共構築な関係」に従えば、プレイス・メイキングは、行為を通して人と環境が連続して結びつくことによって成り立つ過程と考えられる。ただし、この関係が展開するには、その関係を支える地盤が必要である。前掲した南 (2006) も、環境体験と場所との関係に触れ、環境体験が場所で起き、場所に規定されていることを指摘する。このことから、「共構築な関係」やそこで生まれる人の経験は、それらを支える場所という地盤が不可欠と言えるだろう。そして、人と環境の関係や人の経験に生じた変化は、形や意味の変化として場所にその痕跡が蓄積されていくのである。例えば、ある空間にはモノが持ち込まれ、そういったモノたちが行為に調整されながら空間内に配置される。あるいは、かつては無機質な印象だった空間に、いつの頃からか寛ぎを感じるようになる。このような、モノが配置された空間や、人の体験あるいは意味を伴った空間は、場所と言い換えることができる。こうして、人と環境の関係は、その痕跡を残すことで地盤としての場所につながり、ここでも共構築な関係が作られていく。そして、この過程が、Johanssonらがプレイス・メイキングとして述べた「物理的な空間が意味をもった場所になっていく」(Johansson et al., 2013) 過程なのである。

この他、場所は作業の成立にも重要な役割を果たす。前述した行為と作業の関係の通り、複数の行為が、一貫した、あるいは関連した意味でつながったものが作業である。この一貫した意味や相互に関連する意味は、地盤としての場所が存在することによってもたらされると考えることができる。何故なら、場所は、互いに関係し合う人と環境、行為をある時ある所に留めることで、これらが安定して関わることを可能にするからである。こうして、作業は、場所に支えられることで生じていると言うことができる。ところで、南は、常に流動している環境体験は、毎日の生活では繰り返されることも多く、その繰り返しを支えているのが場所であると述べている (南, 2006)。この指摘から、場所は、作業とともに、日課や習慣の構築にも関与していることがうかがわれる。もっとも、プレイス・メイキングは、環境と人、そして地盤である場所が、行為や作業によって1つにまとまっていく過程である。言うなれば、この1つにまとまる過程は、場所の構築であるとともに、作業の構築でもある。前述したHasselkus (1998, 1999)の研究でも、実際に作業が実現する過程を作業的場所と述べ、作業の成立からプレイス・メイキングを捉えている。人と環境、そして場所が調和した関係を築くとき、我々は場所との一

体感やウェルビーイングを伴った作業を経験するのである。

ここで再び「家」を取りあげ、今度はプレイス・メイキングの視点から考えてみたい。場所の感覚の説明でも述べたように、「家」は、その住まい手が安心感や守られている感覚を経験する場所である。そして、この感覚や「家」としての意味は、そこに住む人の行為の連続体でもある作業を通して、作り続けられていくものである。さらに、経験が生み出されてそこに刻まれるだけではなく、住む人の作業によって、その作業に調和した場所の形も作り続けられていく。こうして、ある人の作業が「家」で繰り返されることにより、そこに住む人とその人の作業に最大限に合った家が作られていくのである。これが、「家」をめぐるプレイス・メイキングである。このように、共に構築される関係の中で、人の作業はその作業に相応しい場所をつくり、場所はまた作業をつくる。そして、人が作業を行うということは、同時にその作業を行うのにふさわしい場所を作り続けていくことなのである。

第5章 実践と研究への示唆

以上の内容をふまえ、本稿の最後では、プレイス・メイキングに関わる今後の実践と研究の可能性について述べる。実践においては、クライアントのタイプによってプレイス・メイキングの多様な応用が考えられる。そこで、個人や集団を対象とする場合と社会を対象にする場合について触れたいと思う。そして最後に、プレイス・メイキングの前提となっている全体論の立場を含めて、研究の可能性を簡単に述べる。

1. 個人に対するプレイス・メイキングの実践

個人に対するプレイス・メイキングは、クライアントがある作業と結び付くための支援に当てはめることができる。この支援には、作業そのものを行えるように支えるのと同時に、その作業を行うために最も相応しい場所を作る支援が含まれる。

ここで、図3の写真は札幌で一緒に勉強会を行っている森元さんの作業療法の一コマを再現したものである。森元さんは、老健に入所するAさんの作業療法（岩見他，2008）を担当していた。そして、Aさんとの関わりについて聞いた話の中にプレイス・メイキングを垣間見る場面があった。森元さんは、作業療法で彼女と相談して茶碗洗いをを行うことにした。実際に茶碗洗いをを行う日、Aさんはこれまで使っていた複数の用具を持参してくれた。そこには、事前に打ち合わせていたエプロンだけではなく、彼女が日常的に使っていたスポンジまでもが含まれていた。スポンジは施設に備え付けられていたのだが、彼女は自

ら判断し、彼女の「茶碗洗い」のために使い慣れたモノを持ってきてくれたのである。この様子を振り返ると、Hasselkus が指摘した作業的場所やプレイス・メイキングの過程がよくあてはまる。



図3 個人に対するプレイス・メイキングの実践
(ご本人の承諾を得て掲載)

日頃から、そしてこの日の準備のため、森元さんはよくAさんと一緒に作業の話をしてきた。そこで二人は、Aさんの家事や茶碗洗いのやり方、そして作業への思いを共有した。これは、Hasselkus (1998, 1999) が示した作業的空間において、セラピストと利用者が実際に作業を行う前の様子と似ている。そして、馴染みの用具を持参したAさんは、彼女が使い易い配置に彼女のやり方でそれらの用具を置いた。「茶碗洗い」を行っている間も、道具の置き場所を微調整しながらこの作業を行った。一方、森元さんは、Aさんが持参した用具を喜んで受け入れ、始まりから終わりまでAさんが思い通りに台所を使えるように関わっていた。最初は、どこかぎこちなかったAさんの動きも次第にスムーズとなった。いつしか、台所の中では、主婦の達人であるAさんの「茶碗洗い」が行われるようになっていった。この一連の過程には、思いの共有から始まり作業の実現へと至る Hasselkus (1998, 1999) の作業的場所とプレイス・メイキングが見て取れる。彼女のやり方で、場所を作りながら「茶碗洗い」を行っている間のAさんは、主婦としての自信にあふれた表情をしていた。

別の例として、プレイス・メイキングを住宅改修のアプローチに取り入れることができる。一般的に、住宅改修を行う前には、クライアントの能力や作業に照らし合わせた家屋構造の評価が行われる。例えば、段差、各部屋への導線、玄関、台所やトイレが、クライアントの能力に適切であるかが確認される。さらに、クライアントの将来の能力や作業の変化を見据えた住宅改修の検討がなされることもあ

る。では、ここにプレイス・メイキングの視点を加えると、どのような支援へと広がるのだろうか。この視点により、住宅改修後も続いていく家と住まい手の関係にも支援の目が向けられる。私たちは、日頃から、今いる場所との関係を継続している。ある作業が行い易いように必要な道具を揃えて配置し、不要なモノを処分し、家具の配置を変える。このように、そこにいる場所が、自分や自分が行う作業にとって心地良くなるように、作業を行いながら場所を微調整して作り続けているのである。作業療法士が、プレイス・メイキングの視点をもつことで、改修によって完成された家屋環境を提供するだけではなく、家との関係を作り続けていくことへの支援も意識して行えるのではないだろうか。それは、住宅改修後のフォローアップであるかもしれないし、家との関係を続けるのに必要な能力を獲得するための支援かもしれない。

以上のように、ここに示した2つの例は、共構築な関係や、前述した「人が作業を行うということは、同時にその作業を行うのにふさわしい場所を作り続けていくこと」を考慮した支援である。いわば、刻々と変わっていく関係に着目した、構築過程への支援と言える。

2. 社会に対するプレイス・メイキング

近年では、作業療法を始めとした実践分野で地域づくりが注目されるようになった。社会に対するプレイス・メイキングについては、Rowles (1999) の報告から地域づくりのための示唆が得られる。彼は、アパラチア山脈の麓にある小さな町で調査を行い、高齢者同士が支えあうシステムのことを述べている。そこでは、高齢者が住む家の窓は、外や近隣が良く見える大きなものに変更されていた。そして、高齢者が家の中で行う日課に合わせて、近所の人が散歩などをして窓のそばを歩くことを日課としていた。こうして、窓のそばを散歩しながら、互いを確認し合うシステムが自然な形で構築されていた。ここでは、規則的に行われるコミュニティ全体の作業パターンが作られていた。そして、これには、作業パターンが交わり、人々の交流が生まれる場所が重要な役割を果たしていた。さらに、このような場所で、コミュニティ内の人々の作業パターンが無理なく結び付くことにより、持続可能な確認システムが構築されていたのである。この例では、地域住民が交流する場所が、互いの作業パターンに折り合いを付ける形で構築されていたことが示されている。これに加え、プレイス・メイキングが個人単位だけではなく集団や社会単位でも行われることが理解される。こうして見ていくと、地域づくりを検討する際に、「折り合うこと」をキーワードとした集団単位のプレイス・メイキングの視点をを用い、持続可

能な交流の場を作る支援が考えられる。

3. 今後の研究の可能性

これまで述べた以外にも、作業科学や作業療法では、プレイス・メイキングや作業的場所をテーマとした研究が幾つか報告されている。『Willard & Spackman's Occupational Therapy』(第12版)では、医療社会学者の Moore (2010) がホスピス型のデイケアを利用する患者を対象に行った研究が紹介されている。ここでは、患者がホスピスに馴染み、そこを寛げる場所として経験するようになるまでの過程を3つのステージに分けて報告している。また、小田原 (2014) は、作業療法士の臨床リレーズニングを通じて作業的場所に関する作業療法士の経験を報告している。この他、前述したように、Johansson ら (2013) は高齢者の国際的な移住をテーマとした研究において、プレイス・メイキングが有効な概念ツールであることを示している。一方、この指摘の中で、プレイス・メイキングの具体的な過程や、この過程における作業の関与が明らかになっていないことにも触れている。そのため、今後は多様な人々を対象に、上記の点に関する実証的な研究を行う必要がある。

ところで、本稿のこれまでの記述では、どちらかと言うと場所やプレイス・メイキングにおける健康やウェルビーイングへのポジティブな影響を扱った。さらに、人と場所、そして作業との関係が徐々に結ばれていく過程に着目してきた。しかしながら、場所やプレイス・メイキングを考えたとき、これら以外にも検討すべきことがある。例えば、その1つに、全体性をもたらすネガティブな影響があげられる。人と作業、場所が強く結ばれると、全体としてのまとまりもより強くなると思われる。このような状態では、作業や習慣が安定して構築される。しかし、こうして生み出される作業や習慣の中には、人々にとってあまり嬉しくないものもあるだろう。やめたい習慣や、周りに流されて仕方がなく行っている作業。そして、変わらないと諦めている作業。そのような作業や習慣の中には、個人の意思による選択を超え、プレイス・メイキングが関与している可能性もあるのではないだろうか。

また、先ほど、実践に向けた示唆の中で地域づくりについて述べた。このプレイス・メイキングをベースとした地域づくりについても、今後探求すべきことがある。例えば、地域づくりの進め方には、複数の方法が考えられる。こうした方法論の中で、プレイス・メイキングをベースとした地域づくりは、どのように位置づけられるのであろうか。また、しっかりとしたリーダーシップの基に行われる地域づくりと、プレイス・メイキングをベースとした地域づくりではど

のような違いが見られるのか。さらに、プレイス・メイキングをベースとした地域づくりは、他の方法論とどのように補完し合うのだろうか。

以上、研究に関する私見を述べた。作業と場所との関係、そしてプレイス・メイキングについてはまだまだ明らかになっていないことも多く、今後の研究が期待される。

最終章 まとめにかえて一再びシズさんを考える

冒頭では、過去に関わったシズさんのことを記載した。施設入所後、シズさんに生じた混乱は、場所の感覚やプレイス・メイキングの問題として捉え直すことができる。

老健で過ごすシズさんは、自宅で会ったシズさんとは別人のようであった。これには、施設入所によって、長年住み慣れた「家」と、そこで行ってきた作業を一遍に失ったことが大きく影響したものと思われる。さらに、ここで重要なことは、家や作業といった、それぞれの要素を失ったことに留まらない。プレイス・メイキングから考えられるのは、シズさんが、これまで続けてきた、そして今後も続くはずだった環境や場所との深い結びつきを失ったことである。言い換えると、人と環境や場所、そして作業のまとまりある「関係」を失ったのである。長い間、シズさんが作業を行いながら作ってきた「家」には、彼女の作業に必要なモノ、作業の機会、それらに纏わる意味が、彼女が日常行っている作業によく調和しながら詰まっていたはずである。こうしたモノや意味と結びつくことで、シズさんは日常の作業を行ってきたと考えられる。これに加え、「家」には息子もおり、息子もまたシズさんが日課を行うのを支えてきたであろう。しかし、施設入所によって、シズさんはこれらとの調和した関係を失い、過去の生き様や彼女らしさを反映する作業もできなくなってしまった。その上、認知症を患い、記憶や見当識に障害を抱える彼女は、新たに出会った施設環境の中に、そのつながりの糸口を見つけ出すことも難しかったと考えられる。

人の作業を支援する場合には、ただその人がこれまで行ってきた作業をするだけでは十分ではない。どのような場所で、どのようなやり方で行ってきたかを考えながら、同時に作業が行われる場所を作っていくことへの支援がとても重要である。シズさんとの関わりにおいても、作業と場所を別々に捉えるのではなく、セットで考える視点が必要であった。そうすることで、作業を行いながら、彼女が環境との関係を築き、彼女と彼女の作業にとって必要な場所を作っていくことへのお手伝いができたと考える。

以上、私が、臨床時代に抱いた疑問から始まった作業と場所の探求で得た知見とそこから考えられる実践と研究の示唆を述べた。特に、本稿では、プレイス・メイキン

グの概念とトランザクションの視点に焦点をあて、作業との関係を含めて示してきたつもりである。このプレイス・メイキングは、単に作業の地盤となる場所を作ることだけを示す概念ではない。この概念は、人と環境、作業の関係に対する捉え方にも示唆を与えるものである。ここでは、環境や場所を人々の外側に位置づけるのではなく、これらを「全体」としてセットで考え、共に構築されていく過程を扱っている。そのため、今後研究を深めることにより、作業がある場所でどのように生じるかについても説明しうるものとする。このような点からも、プレイス・メイキングは、私たちが作業をより深く理解し、作業科学の発展を目指すうえで重要な概念ツールの1つと言える。さて、作業と場所の関係、プレイス・メイキングをテーマとした作業科学研究は、まだ始まったばかりである。作業科学が、作業についての豊かな知識を生みだし、作業に基づく実践にも貢献できるよう、さらなる研究が望まれる。

謝辞：本稿は科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究（課題番号：24650457、研究代表者：坂上真理）の助成金を受けて行われた研究の一部を含むものである。

脚注1) ケアハウスは、軽費老人ホームC型とも呼ばれ、社会福祉法人や地方自治体、民間事業者などが運営し、社会福祉法に定められた福祉施設である。対象は、自炊ができない程度の身体的な機能の低下がある人、または独立した生活を送ることに不安があり、かつ、家庭環境や住宅事情等により居宅での生活が困難な、60歳以上の人である。

文献

- Aldrich, R. M. (2008). From complexity theory to transactionalism: Moving occupational science forward in theorizing the complexities of behavior. *Journal of Occupational Science*, 15, 147-156.
- Clark, F. (佐藤剛・訳) (1995). 作業学—リサーチと実践に向けての新しい展望. 第28回日本作業療法士協会全国研修会プログラム・抄録集, 19-58.
- Cutchin, M. P., Aldrich, R. M., LucBailliard, A. & Coppola, S. (2008). Action theories for occupational science. *Journal of Occupational Science*, 15, 157-165.
- Johansson, K., Rudman, D. L., Mondaca, M., Park, M., Luborsky, & Asaba, E. (2013). Moving beyond 'aging in place to understanding migration and aging: place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science*, 20, 108-119.
- Hamilton, T. B. (2010). Occupations and place. In Christiansen,

- C. H. & Townsend, E. A. (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living 2nd ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson. pp.251-280.
- Hasselkus, B. R. (1998). Occupation and well-being in dementia: The experience of day-care staff. *American Journal of Occupational Therapy*, 52, 423-434
- Hasselkus, B. R. (1999). Occupational space and occupational place. *Journal of Occupational Science*, 6, 78-79.
- 岩見彩子, 浅野葉子, 坂上真理 (2008). 意味ある作業をきっかけに, 自ら自己を作り上げていった事例～「左手を治すこと」に執着していたAさん～. *北海道作業療法*, 25, Suppl., 73.
- Josephsson, S. (2009). Astrid and Japanese cherry tree: A reflection on transformation and occupation, *作業科学研究*, 3, 14-19.
- Kuo, A. (2011). A transaction view: Occupation as a means to create experiences that matter. *Journal of Occupational Science*, 18, 131-138.
- 南博文 (2006). 環境との深いトランザクションの学へー環境を系に含めることによって心理学はどう変わるか? 南博文編著. *環境心理学の新しいかたち誠信書房*. pp3-44.
- Moore, A. J. (2010). "Space, place and 'home': lived experiences in hospice day care" (Doctoral dissertation). *University of Lancashire*, UK.
- 小田原悦子 (2014). 新しい作業的場所ー作業療法士のクリニカルリーズニングー. *作業療法*, 33, 401-410.
- Relph, E. (高野岳彦, 阿部隆, 石山美也子・訳) (1999). *場所の現象ー没場所性を越えて*. ちくま芸文庫.
- Rowles, G. (1999). Beyond performance: Being in place as a component of occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 265-271.
- 坂上真理 (2007). 高齢期リロケーション研究における「場所」の構築過程の検討. *北星学園大学大学院博士課程学位論文*.
- 坂上真理, 近藤知子 (2010). ケアハウスに入居する高齢女性の転居後の自分らしさの発現過程. *作業療法* 29, 587-596.
- Sakaue, M. (2008). The adaptive process of the frail elderly when relocating to an intermediate care facility - a Japanese study with implications for the baby boomer generation-. *4th Canadian occupational science symposium program*. 19.
- Seamon, D. (2014). Physical and virtual environments: Meaning of place and space. In Schell. B.A. , Gillen G. & Scaffa, E. M. (Eds.), *Willard & Spackman's occupational therapy, 12th ed.* Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins. pp. 202-214.
- Shank, K. H. & Cutchin, M. (2010). Transactional occupation of older women aging -in-Place: Negotiating change and meaning. *Journal of Occupational Science*, 17, 4-13.
- Stanyer, J. (1994). The home: An occupational ideal. *Journal of occupational science*, 1, 31-36.
- Stark, L. S. & Sanford, A. J. (2005). Environmental enablers and their impact on occupational performance. In Christiansen, H. C. & Baum, M. C. (Eds.), *Occupational therapy: performance, participation, and well-being*. Thorofare, NJ, Slack. pp. 299-336.
- Tuan, Y. (山本浩・訳) (1993). *空間の経験ー身体から都市へ*. ちくま芸文庫.
- Tupe, D. (2014). Emerging theories. In Schell. B.A. , Gillen G. & Scaffa, E. M. (Eds.), *Willard & Spackman's occupational therapy, 12th ed.* Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins. pp. 553-562.
- 吉永明弘 (2007). 人間主義地理学は環境論にいかにか寄与しうるか. *公共研究*, 4, 9-36.
- Zemke, R. (2004). Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 608-620.